

ウィーン あの頃 この頃

～オーストリア日本人五十周年に寄せて

近藤常恭

私がウィーンに移り住んでから三十六年になります。当時フォルクスシューレ（小学校）一年に入ったばかりだった娘が今ではギムナジウムに通う子供の親。早いものです。でも日本人会は設立五十周年とのこと、これはオギャーと生まれた赤ちゃんに早ければお孫さんのできる歳月だから大したもの。そしてその設立当時の事を御存知の方もおられるのだから、私などはまだ昔の事を語る資格などないかも知れません。

でも思い起こすと変り方の少ないウィーンも随分変貌したと思います。先日、日本人学校と日本人会主催の「日本の祭り」を訪れるため、久しぶりにドナウの橋を車で渡った時、一瞬昔の光景を思い出しました。この橋は以前は高い二つの橋柱とワイアに支えられた巨大な吊り橋でした。それが一九七六年夏の或る日、大音響と共にドナウの中へ崩壊したのです。不思議にも日曜の早暁だったので惨事にはならなかったのですが、現場に駆けつけてみると橋の残骸を乗り越える恐ろしい濁流の彼方には、ドナウタワーだけがポツンと淋しそうに立っていました。その頃はまだUNOシティも高層ビルも街もまだ想像することさえ出来なかったのです。今のライヒス橋はずっと後に再建されたものです。



日本人学校は以前は十九区の住宅街にありましたが、私の来た頃は学校がまだ認可もされておらず、学齢期の子供を持つ親達（私もその一人でしたが）の有志が集まってこじんまりと日本語の学習室を開いていました。



私は一九七二年にシュテファン広場のすぐ近くにオーストリアで最初の日本レストランを開き、お寿司も商業ベースでは初めてこの国の人に紹介しました。だからその頃の日本人会とのお付き合いと言えば、総会とかその他の催物の機会に特製のお弁当を作って協力させて頂く事でした。まだ日本食などなかなかありつかなかった時代、会

員の皆さんの喜ぶ顔が何より嬉しい思い出として残っています。

当時は地下鉄もまだ全くありませんでした。私とそのレストラン（現存せず）を開いてすぐの事、シュテファン広場周辺は地下鉄駅建設工場の現場となり随分苦勞しました。それが二年程経って片付けられ始めたのでやれやれと喜んで係りの人に訊ねたところ、「いやこれは駅を作って良いかどうかの調査の工事が終わったところですよ」と言われショックを受けました。でもウィーンではそんな事で驚いてはいけません。だってあのシュテファン大聖堂は八百年経っても未だ本当は完成していないんだから、と慰められました。



その地下鉄も今は立派な設備の五路線が運行、私も毎日お世話になっています。

ケルトナー街も昔は車が往来し、歩行者天国になったのは一九七四年のこと。リング大通りも長い間、対面交通でした。

私はウィーンに来て以来、レストラン、日本食品の輸入や販売など、食を通じてこの国と日本を結ぶ仕事に携わって来ました。日本料理の店はかなり長い間私の店だけでしたが、今では立派な店が何軒もあり、日

本人以外の経営する店も入れれば、お寿司やお寿司らしきものを食べられる処が何と二百軒以上。信じられない変化ですが、これも建築とか交通とか目に見える物だけでなく、人々の生活意識の中でウィーンが大きく変って来ている証拠の一つです。

一九八九年、鉄のカーテンが切り落とされてウィーンは東西対立の最前線都市から再び中欧の中心都市に蘇りました。これは何より大きな喜びです。そして古き良き文化の伝統を守りつつもウィーンは新しい国際都市に変貌しつつあります。嬉しい事です。

設立五十周年に当り、日本人会が会員同士の交流を深める楽しい有益な会として益々栄えると共に、この国との国際交流にも彩りを添える会として一層親しまれて行く事を心から願っています。



* 写真はかつてのウィーンの町並み。近藤さん提供

<近藤 常恭（こんどう・つねやす）>

1931年生まれ。青山学院大英文科卒。

教職を経て1960年、渡欧。ベルリン、ロンドンで貿易、レストラン経営等に従事。1972年にウィーンに移住。「レストラン東京」開業（1978年迄）。現在日本食品店「日本屋」経営。著書に『ベルリン』、『ドイツの旅』など。